

アドベントの三週目を迎えました。「アドベント」とは、日本語では「待降節」「降臨節」といったりしますが、その意味においては、英語の「Coming」、つまり、「到来」「来られる」といった意味があります。では、いったい誰が来られるか？それは、クリスマスの主人公、主イエス・キリストです。主イエスは、すでに約二千年前にこの世に来られました。私たち罪人を救うため、多くの苦しみを受け、十字架につけられ、贖いの死を成し遂げられたのです。ご自分を救い主と信じるすべての人に罪の赦しを与えるためです。

それだけではなく、主イエスは、三日目に死人の中からよみがえられることで、ご自分を神の子、救い主として証されました。ご自分を信じるすべての人に神の子どもとなる特権、永遠のいのちを与えて下さるためです。私たちは、この救い主がすでに来られたことを喜び祝い、今日もこのように主に礼拝をささげているわけですが、アドベントには、もう一つの意味があります。それは、死よりよみがえり、天に昇られた主イエスが、終わりの日に再びこの世に戻って来られるというものです。私たちの救いを完成して下さるためです。

すべてのクリスチャンは、この再び戻って来られる主（再臨の主）を、今日も待ち望んでいます。ですから、アドベントとは、直接的には毎年この時期を指すわけですが、でも毎日がそうであるといっても間違いではないのです。そして、それはクリスマスにおいても同じことが言えます。なぜなら、Christmasとは、救い主を意味する Christ と、祭りや礼拝を意味する Mass（ミサ）の合成語ですが、つまり、それはキリストの祭り、礼拝という意味だからです。ということで、少し前置きが長くなりましたが、今日の内容に入っていきます。まず今日の箇所を背景を理解するために、その前のところをお読みします。

ルカ 1:26-38、「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。28 御使いは、入って来ると、マリヤに言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。』29 しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。30 すると御使いが言った。『こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。』34 そこで、マリヤは御使いに言った。『どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知らないのに。』35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。37 神にとって不可能なことは一つもありません。」38 マリヤは言った。『ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』こうして御使いは彼女から去って行った。

ここでは、マリヤが主イエスを身ごもるようになった経緯が記されていますが、まずいくつかのことに目を留めたいと思います。一つ目は、マリヤは、神様によって救い主を宿す者、その母として選ばれたということです。ここには「選び」という言葉は出てきません。でも、御使いガブリエルが、神様から遣わされてマリヤのもとに行ったということは、彼女が神様に選ばれたことを意味しています。

もう一つのことは、このことがマリヤにとって「恵み」であったということです。というのも、彼女が身ごもるのは、私たちのような普通の子ではなかったからです。聖書は、私たちがみな生まれながらに自己中心な者、つまり、うちに罪を宿す者であるといっています。それゆえに、教えられなくても、私たちは物事を自分中心に考えることに長けていて、その結果、神様の存在を否定し、親に反抗し、嘘をつき、人のものを欲しがり、手に入らないと嫉んだり、憎んだり、盗んだりといった罪を犯すものです。でも、マリヤが神様から恵みを受けて身ごもる子は、罪のない、聖なる者、いと高き神の子でした。

さらにガブリエルはこうも言ったのです。「神様は、その生まれて来る子に、その父ダビデの王位を与え、彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国を終わることがない」と。今日は、この詳細については見ませんが、ここで語れていることの意味、それはユダヤ人ならだれもが知っていました。つまり、それは神様が、聖書を通して約束しておられた来るべきメシヤ（救い主）を指していたのです。もちろんマリヤもそれを知っていま

した。ですから、今日の 54-55 節 で彼女はこう言ったのです。「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです」。マリヤは、自分に与えられる子が、その約束の子孫、キリストであることを知っていたのです。

このようにして彼女は、神様の選びによって救い主を身ごもるといふ恵み（特権）を受けました。ただ、そのことが実現へと至るためには、危険となり得ることが彼女を待ち受けていたのです。それは、彼女がまだ男の人を知らない、つまり、処女であったということにかかっています。というのも、この時点で、マリヤはすでにヨセフと婚約していましたが、ガブリエルは、ヨセフによってではなく、神の力、つまり、聖霊によって身ごもると告げたからです。このことは、私たちの常識から外れているゆえに、昔も今も変わらず、多くの人にとって議論のもととなっているわけですが、でも、今日私が皆さんにここで考えてほしいこと、それはあなたなら、このような神様の選びと恵みに対してどう応答したであろうかということです。

いかがですか？もしあなたがマリヤなら、このように語られて納得がいったと思いますか？ガブリエルは、マリヤの親類のエリサベツが高齢で、しかも不妊であったにも関わらず、男の子を身ごもり、すでに6ヶ月であることを告げることで、「神にとって不可能なことは一つもありません」と言ったわけですが、それであなたなら、「はい、信じます」となったと思いますか？婚約者がいながら、子を宿すということ、しかも、それが婚約者の子でないとしたら、そこから良い結末は到底期待できません。天使がそのように語ったと説明して、誰が信じるでしょうか？

マリヤが神様から受けた恵み、それは間違いなく、他の誰も経験できないような大きな恵みでした。でもそこには、彼女にとって大きな試練となることも待ち受けていたのです。もしそこに神様の介入、つまり、助けがなければ、彼女はこのことを通して命を落としてもおかしくありませんでした。そのようなことが考えられる中で、マリヤはこう応答したのです。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」。この決断に至るまでに実際にどれだけの時間を要したかはわかりません。でも、マリヤは、自分のことを主のはしため、つまり、しもべ・奴隷と言うことで、主が語られたとおり、自分の身になることを願ったのです。

このマリヤの言葉は、クリスチャンにとっては、実に聞き慣れたものであると思います。でもこの彼女のこぼの中に、マリヤが救い主の母となる恵みを受けた理由、神様によって選ばれた理由が見れると思うのです。また後でも触れますが、マリヤは、自分を主に仕える者と理解することで、また神様にとって不可能なことは一つもないと信じることで、自分自身の身を差し出し（ゆだね）、その恵みを自分のものとして受け取りました。そして、ガブリエルが語ったことを確認するかのよう、エリサベツのもとへと向かったのです。

39-45 節「そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。40 そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。42 そして大声をあげて言った。『あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。43 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。44 ほんとうに、あなたのあいさつの声私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。』」。

誰かの声や音で、お腹の赤ちゃんが動くというのは、ごく普通のことです。ただここでは、「子が胎内でおどった」とあります。ちなみに、これはバプテスマのヨハネですが、ルカ 1:15 には、彼が「まだ母の胎内にいるときから聖霊に満たされ」と記されています。それがどんな状態であったかはわかりませんが、ここでは、その母エリサベツも聖霊に満たされることで、マリヤを祝福してこう語ったというのです。「主によって語られたことは必ず実現すると信じてきた人は、何と幸いなことでしょう」と。

このところからも、マリヤをして彼女が救い主を身ごもるといふ恵みに与ったのが、神様によって選ばれ、御使いガブリエルを通してそのように語られたからだけではなく、マリヤがそれを信仰をもって受け入れたからであることがわかります。彼女のそのような信仰は、どこから来たのでしょうか？46-48 節「わがたましいは主をあがめ、47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。48 主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう」。

この46節以降のところは、「マリヤの賛歌」として知られるものですが、彼女はここで神様のことを「わが救い主なる神」と呼び、主を喜びたたえると同時に、ここでも自分自身のことを「卑しいはしため」と言っています。「はしため」というのはすでに見ましたが、この「卑しい」というのは、「低い」という意味です。つまり、マリヤは自分が高い者ではなく低い者、主人ではなく、しもべであることを知っていました。

彼女がどのようにして自分のことをそのように考えるようになったかはわかりません。ナザレという田舎町で育ったことや女性として生まれたこと、また当時のイスラエルはローマの植民地状態にあったので、そういった意味において、自分を低い者と考えたのかも知れません。でも、もしそれだけなら、他にも同じような境遇の女性はたくさんいたことでしょう。では誰でも良かったのか？そうではないと思います。神様は、確かにマリヤを選ばれた。彼女が自分を卑しい（低い）者、主のしもべと考え、また主が語られたことは必ず実現すると信じる信仰をもっているのをご存知で、神様はマリヤを選び、彼女に恵みを与えられたのです。

そのことを証明するかのようには、マリヤはその続きでこのように神様をほめたたえました。49-55節「力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

マリヤは、このように救い主なる神様を喜びたたえましたが、神様というお方は、実にこのようなお方です。この天地万物を創造された力ある方、私たち自己中心な者、心の汚れた罪人とは違って、聖いお方です。にも関わらず、私たちにあわれみ深くあって下さるお方です。ご自分の前に、高ぶる者は低くされますが、主を恐れかしこむ者、主はへりくだる者を主は高く引き上げて下さいます。マリヤは、「そのような方が、自分のような低い者に目を留めて下さった。実に、人類を救うために来られる救い主の母となる恵みを与えて下さった」と喜びにあふれ、まるでこの後、何の困難も襲って来ないかのように神様を心からあがめたのです。

これが、主と主のみことばを信じる者に与えられる喜びであり、恵みです。神様は、ご自分を信じる者に、このように言わせて下さるのです。マリヤはこのように賛美しましたが、神様が力ある方、聖なる方、あわれみ深い方、語られたことを実現される方であることを彼女が本当の意味で知ったのは、主の語られたことを信じて、自分自身を主にささげた後です。ここでのエリサベツの証言に始まり、神様が夢でヨセフに語られることで、彼がマリヤを妻として迎えたこと、ベツレヘムの家畜小屋で主を産んだ時、当時の社会で最も低い者とされていた羊飼いたちが御使いの知らせを受けて、主を拝みに来たこと、また東方の博士たちが幼子イエスに黄金、没薬、乳香をささげて彼を礼拝したこと、シメオンや預言者アンナが幼子イエスを見て、神の救いを語ったこと、ヘロデの殺害の手から救われたことなどがあげられます。

また何よりも、マリヤは自分が身を痛めて生んだわが子イエスの死を通して、神様が力ある方、聖なる方、あわれみの方、語られたことを実現される方であることを味わい知ったのです。彼女にとって、いくらそれが自分を含む、すべての罪人を救うためであると知っていても、主イエスが苦しめられ、十字架につけられるのを見るのは、痛みそのものであったと思います。シメオンが「剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう」（ルカ2:35）と語った通り、主の十字架はマリヤにとってその心を剣で刺されるようなものであったと思うのです。

でもマリヤは、その苦しみ、叫びの後で、わが子を、いや、神の救い主である主イエスに出会います。聖書に記され、また主自身も語っておられた通り、三日目に主がよみがえられたからです。なぜそのことがわかるのですか？復活された主は、弟子たちに現れた後、天に昇りましたが、その際、エルサレムを離れず、約束の御霊を待つようにと彼らに命じられました。そこで弟子たちは集まり、祈りに専念していたわけですが、その中にマリヤもいたからです（使1:14）。彼女もまた主を救い主と信じ、救いの望みを彼に置いたのです。

主によって語られたことは必ず実現します。マリヤのように、神様の前に自分を卑しい者、つまり、救いを必要とする罪人であると認め、そんな者を救うために来られた主イエス・キリストを信じる人は、みな必ず救われるのです。そのために主は、この世に生まれて下さったからです。